２０２３年７月３０日　青戸教会　説教『弟子の覚悟』　　高橋克樹牧師

聖書　列王記上１９章９～２１節、ルカ福音書９章５１～６２節

ルカ福音書によれば、４章１４節から９章５０節までがガリラヤでの宣教活動になっています。そして、９章５１節で場面ががらりと変わり、イエスがエルサレムを目指して歩み始めるのです。５１節を見ると、『イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた』とあります。

そして、サマリア人の村に入られるのですが、その際に、先に弟子を使いに出して、宣教活動の下準備をさせてから、サマリア人の村に入ったのでした。ところが、ルカ福音書には何も詳しく書いてないのですが、『村人はイエスを歓迎しなかった』（５３節）のです。その理由は『イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである』（５３節）とあるだけで、何が原因でイエスが歓迎されなかったのかは不明のままなのです。

いずれにしても、イエスが歓迎されなかったので、弟子のヤコブとヨハネは『それを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った』（５４節）のでした。これはイエスが天からの火を用いて滅ぼすということではなく、ヤコブとヨハネが自分たちの力で天から火をもたらして、サマリヤ人の村を焼き滅ぼそうという提案をしたわけです。

これを聞いたイエスはエルサレムを目指して先頭で歩いていたにもかかわらず振り向いて、２人を戒められたのです。ヤコブとヨハネがイエス一行を歓迎しなかったサマリヤの村での理由は何も書いてありませんが、ヤコブとヨハネは、イエスに天から火を降らせてもらおうとしたのではなくて、自分たちの力でサマリヤ人の村に対して。歓迎しないことの復讐をしようとしたのです。子の弟子たちの反応は、自分の思い通りにならなければ、その対象を滅ぼしてしまえば、気持ちがすっきりするという気持ちが現れています。

また、自分の意志を邪魔する者を滅ぼしてしまえば、確かに自分の思い通りにできるかもしれませんが、イエスが既に実現している神の国での信仰者の働きとしてはふさわしいものとは言えないのです。５７節～６２節までの個所の小見出しは「弟子の覚悟」となってしますが、そこでイエスを信じて従っていく生き方においてはエクスキューズを言ってはならないことが繰り返し語られています。率先してエルサレムへ向くイエスの姿に従っていくことに対してエクスキューズを言ってはならないことが強調されています。

十字架刑死を迎えることになるエルサレムを目指すイエスの歩みは、自分の命を差し出す命がけの旅です。しかし、『神の国を言い広め』（６０節）『神の国にふさわしい』（６２節）者を増やしながら、神の国の最終的な実現のためにエルサレムを目指すイエスに従うことにおいて、自分の個人的な都合をエクスキューズの理由にして、後回しにすることは、イエスを信じる信仰者としてはふさわしくないというのです。

確かに、人間的な心情としては、自分の抱えている課題や未完のままのこと荒を片付けて気持ちもすっきりしてイエスに従っていく方が、余計な心配事に煩わされずに、宣教活動に邁進できると考えがちですが、そうではないというのです。

イエスが宣べ伝えた神の国のことを考えてみると、このエクスキューズを言う生き方は、弟子

として従っていく上ではふさわしくないのです。５７節以下で弟子志願をする人に対してイエスは『狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕するところもない』（５８節）と言って、何か整った場所があるわけではないということを狐や鳥の例を用いて話すのです。

そのあとに、弟子志願する人に対してイエスは「わたしに従いなさい」と言ったところ、「まず、父を葬りに行かせてください」と言ったのです。さらに、別の弟子志願の人は、「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください」と言ったのでした。これらのエクスキューズは、現実に自分に当てはめてみると、言いたくなる理由です。

自分の親の葬儀を済ませないで、イエスに従っていくならば、まず、それを済ませてからでも、遅くはないと判断してしまうのではないでしょうか。また、海外へ何年も宣教活動に出かけるとしたら、出発前に家族と過ごす時間を作ろうとするのが自然な感情でしょう。けれども、神の国ではそのような意識は後回しにされるというのです。

イエスが神の国に見い出したものは、９章４８節にあるように、『わたしを受け入れる者は、私をお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である』とあるように、皆の中で最も小さい者こそ、大きい者とされるのです。神の国はイエスを受け入れる者であり、イエスを遣わした神の意志を体現する者のことです。

神の国においては神の愛と正義が大切にされる場所です。そこは、この世で公正に扱われていない人や、肩身の狭い思いを強いられている人、つまりは「最も小さい者」を偏って愛することが、神の国にふさわしいことであり、そのような偏った愛こそが神の愛の本質を表しているのです。ですから、力ある者が無暗に暴力をふるったり、「最も小さい者」を拡大再生産することを罪として排除するのです。そして神はこのような罪を指摘して、拡大再生産されることを防ごうとするのです。それが神の正義です。このような神の国の実現のために働くことこそ、イエスに従う道なのです。

この正義と愛は互いに表と裏の関係性になっていて、神の愛なしに、正義は実現しませんし、神の正義なしに罪も明らかにされません。また、愛ある行いもはっきりしません。愛のない正義は人を無暗に苦しめるモラハラを想像してみると了解できると思います。

エルサレムの十字架刑死を目指して歩み続けるイエスの胸に去来するのは、自分が殺されたのちの弟子たちの行く末です。ですから、イエスはイエスが指し示す神の国において、どのような態度で意志決定していくべきかをここで強調しているのです。いわば弟子としての覚悟です。

神の国においては愛と正義が全うされるのですが、エクスキューズを言う逃げ道をいつも用意していると、最も小さい者が拡大再生産されていても、エクスキューズを言い訳にして現実の不正義を見過ごしてしまうようなことが起こるのです。そのために、神の愛と正義が全うされるべき神の国を実現させていく私たち信仰者の働きを中断させてしまうことが容易に起こってしまうのです。

私たち信仰者は、自分の安寧を願うだけでなく、この世に神の国を実現させようとする神の意志に参与する栄誉ある働きに召されているのです。